

## 梁啓超の經濟思想

森 時彦

はじめに

梁啓超の經濟思想は、政治思想と不可分のものであった。中国民族の危機克服を生涯の課題とした梁啓超にとって、そもそも政治、經濟などのジャンル分けはあまり意味のある措置ではなかった。いかなるジャンルであれ、当面の課題を解決するために有用かつ必要とみなせば、まずはアプローチしてみること躊躇はなかった。とりわけ日本亡命後の梁啓超は、森羅万象すべてをおおい尽くさんばかりの知識欲にかられて、あらゆるジャンルの西歐近代学説を日本語経由で撰取しようとした。一九〇二年二月に創刊した『新民叢報』に、第一四号から設けられた「新智識之雜貨店」なる欄は、あたかもこの時期の梁啓超の旺盛な西歐近代学説の撰取ぶりを象徴するタイトルのようにも思われる。しかしその受容のあり方は、系統性のない雜貨店方式ではなく、一貫したポリシーで吟味された専門店方式であった。そのポリシーとは近代国民国家形成の志向にほかならない。

従来の研究では、洋務思想、変法思想さらに革命思想へと展開する中国近代政治思想史の脈絡において梁啓超の役割を説明することに関心が集中した結果、いきおいその政治、社会思想に多くの考察が加えられてきた。しかし西歐

近代学説をトータルに理解し、摂取しようとした梁啓超の知的スタンスを考慮するならば、その思想的営みの全体像を再構成するためには、当然その経済思想にも考察の対象を広げ、政治、社会思想との相互連関を鮮明にする必要がある。本稿ではこのような点に注意を払いながら、梁啓超の生涯にわたる経済思想の変遷をトレースすることにした。

### 一、変法思想と古典経済学説

日本亡命以前の梁啓超は、康有為の変法思想の影響下にあった。その歴史認識、ひいては世界観は、変法運動のイデオロギーともいうべき公羊派の春秋三世説をベースに形成されていた。西欧経済学説の受容に際しても、このような素地がまずそのあり様を規定した。<sup>(1)</sup>

西欧経済学説との接触の機会は、京師同文館、広学会、江南製造局などで出版された翻訳書の閲読が最初であった。もっとも当時目にするのできた経済学関係の翻訳書は、梁啓超自身のちに嘆いているようにきわめて種類が限られていた。『西学書目表』（上海時務報館、一八九六年）の商政には、四種の書物を列記しているが、経済学関係の翻訳書というと、『富国策』『富国養民策』の二種だけで、「史記貨殖列伝今義」〔時務報〕三五冊、一八九七年八月八日）に引用している『佐治芻言』まで含めても三種にすぎない。

『富国策』は、H. Fawcett, *Manual of Political Economy*, London, 1863を同文館副教習の汪鳳藻が翻訳したものである。原著者フォーセットはイギリス古典学派のもっとも正統的な継承者で、その教科書は自由主義経済学の模範的な解説書といわれた。<sup>(2)</sup> 一方『佐治芻言』は経済学専門の書物ではないが、一部盛り込まれている経済学関係の記述は古典学派の学説に沿ったものである。

また『富国養民策』は、W. S. Jevons, *Political Economy*, London, 1878の艾約瑟（Joseph Edkins）による翻訳で

ある。ジェヴォンズは限界革命 (Marginal Revolution) のパイオニア的存在で、新古典学派と目される經濟学者である。原著は、ハックスリーらを編者とする Science Primers という双書の一冊で、内容も至って啓蒙的なものであつて、基本的な構成は古典学派の教科書とさして変わりはない。学説史の上で古典学派との重要な相違点は、真珠取りの潜水夫という有名な例を用いて、アダム・スミスの労働価値説に批判を加え、限界効用学説の一端を展開している第七五節にある<sup>(3)</sup>。

しかしながら梁啓超は、「史記貨殖列伝今義」に引用されている部分から判断するかぎりでは、『富国養民策』の中では、太陽黒点と景気循環の關係について論じた、かの有名な一節にもっともつよく興味を引かれたようで、『史記』に記されている十二年周期の飢饉という経験則とよく合致するとの感想を表明している。ところが新古典学派、ジェボンズの真骨頂ともいふべき限界効用学説の部分にはまったく注意を払つた形跡がない。

したがつて、日本亡命以前においてすでに梁啓超は、古典学派と新古典学派の優れた啓蒙書をそれぞれ一種ずつづつ読んでいたのではあるが、新古典学派についてはその核心部分ではなく古典学派からの継承部分に多く眼を注いでいたように見受けられるところから、実質的には古典学派の観点にそつて西欧經濟学説を受容しはじめたと考へてよいであらう。

「史記貨殖列伝今義」<sup>(4)</sup>の中で、梁啓超が自らの見解をつよく主張しているのは、重商主義的な保護貿易論を批判して古典学派の自由貿易論を称揚しているつぎの一節である。

西国の旧制、毎に進口税を重収して以て本国の商務を保たんと欲する者あり。近時、各国なお多くこれを行なう。惟だ富国学に明らかな者は皆その非なるを知り、以為らくこれ実に病国の道なりと。……然りとはいえども財政なる者は、天下の事なり。全地球の地力、人力の産するところ、需めるところを合せてこれを消息するにあらざれば、則ち以てその比例を得るなし。故に大学、理財の事、平天下に帰するなり。僅かに一国のみを治めるは、抑

も末なり。『文集』二、四〇頁)

梁啓超は、リカードの比較生産費説にもとづく自由貿易論を支持しながら、その議論の帰趨であるコスモポリタニズムが、『大学』に説く平天下にいたる理財の道と符合することを確認している。また別の個所では、春秋三世説に依拠しながら「故に理財の学を言う者は、当に国の差別、界限を並べてこれを無にすべし、差別あり界限あるは、斯ち已に下なり」(『文集』二、三六頁)と述べ、自由貿易によって実現される国際分業こそがあるべき理想の状態であるとも主張している。『大学』の説く平天下、公羊派の春秋三世説いずれの世界観も、自由貿易論擁護の有力な論拠となりえたのである。この時期梁啓超は、春秋三世説にもとづく康有為の進歩史観を援用しながら、未来の理想社会に直結する経済学説として古典学派の自由貿易論を賛美する立場にたっていた。いわば公羊派の大同主義と古典学派のコスモポリタニズムが符合する点に、変法イデオロギーの正当性、普遍性を主張する論拠を求めたとも考えられる。

しかし未来の理想社会への第一歩として着手された戊戌変法は、わずか三か月で挫折し、一八九八(光緒二四)年九月の政変ののち、梁啓超は難を逃れて日本に亡命した。その船中、身一つの梁啓超は、艦長から借りた東海散士の政治小説『佳人之奇遇』を耽読して無聊をなぐさめたと自述している。女主人公紅蓮が語るアイルランド独立運動の悲劇は、自らの遭遇した運命と重なりあつて梁啓超に深い感銘を与えたものである。日本亡命後、横浜で創刊した『清議報』に一年近くにわたりその翻訳を連載することになったのは、この折の耽読に端を発しているという(『任公先生大事記』)。

この小説の冒頭で紅蓮は、アイルランドがイギリスに併呑された経緯を語りながら、イギリス古典学派の唱える自由貿易主義をつぎのように批判している。

若シ一たび彼四海兄弟自由交通ノ甘言ニ欺カレ彼ト自由ニ貿易シ彼ノ干涉ヲ招クトキハ、其邦国(トトル)其、印度、

埃及、諸邦)ハ漸次ニ生齒減ジ国力疲レ、国ニ独立ノ名称アルモ独立ノ実力ヲ欠キ、年々歳々貿易鈞ヲ失ヒ、金宝ヲ輸出スル、名ハ入貢ニ非ズト雖モ実ハ国民ノ膏血ヲ絞テ以テ英国ニ貢スルニ異ナラザルナリ。然ルニ世ニ空理ニ迷ヒ英人ノ術中ニ陥テ之ヲ曉ラザル者少カラズ、真ニ浩歎ニ堪ヘザルナリ。

トルコ、インド、エジプトの諸国がイギリスに抑圧されるようになったのは、もっぱら世界主義的な自由貿易論の空理に惑わされた結果であると断言しているのである。東海散士、すなわち柴四朗は、一般には明治中期に活躍した、政治小説とくに国権小説の作家として知られているが、その実アメリカ留学中はハーヴァード大学で政治、経済などを学び、さらにペンシルヴァニア大学ではもっぱら経済学を修めて、一八八四年に財政学士 (Bachelor of Finance) の学位を得て帰国した新進の経済学者であった。柴四朗によい影響を与えたのは、建国期アメリカの経済学者ケアリー (Carey, Henry Charles) の学説であったとされる。アイルランド移民の出版業者の家に生まれたケアリーは、イギリス体制 (British system) の自由貿易を批判して、独自の保護主義的国民主義経済学を完成した人物として知られる。柴四朗はこのケアリーの古典派批判の経済学にもとつきながら、鹿鳴館時代の日本を風靡していたイギリス崇拜、自由主義経済信奉の風潮に警鐘を鳴らす意図をもって、『佳人之奇遇』を執筆したといわれている<sup>(6)</sup>。紅蓮の口を借りて語られていたのは、まぎれもなく建国期アメリカの国民主義経済学の立場からのイギリス自由主義経済学批判だったのである。

このような来歴の『佳人之奇遇』を耽読したことは、梁啓超の政治思想ばかりでなく経済思想にも一つの転機をもたらす一因になった。日本亡命後一年余りにして、「世界主義は理想に属し、国家主義は事実<sup>(7)</sup>に属す。世界主義は將來に属し、国家主義は現在に属す」(『自由書 答客難』『清議報』三三册、一八九九年二月三日、『專集』二、三九頁)との見解を表明したのも、そのような転向の端緒にはかならない。しかし当面、梁啓超の思索は政治制度の近代化、西欧化をめざした戊戌変法が夭折した原因の究明に忙殺されていた。

## 二、中国と欧州の「国体」

戊戌変法の挫折をなめた梁啓超は、一九世紀末の世界にあって、「文明進歩」の点で欧州から「相去ること霄壤も畜ならぬ」ほど遅れをとってしまった中国の立場をあらためて痛感した。その乖離をもたらした原因は、いったいどこにあるのか、その格差をうめようとしたり自分たちの変法運動は、なぜ失敗したのか、日本亡命後の梁啓超は、この問題の検討に思想的営みのすべてを傾けた。

梁啓超はその手がかりを歴史に根ざす「国体」の異同に求めようとした。「論中国与欧州国体異同」(『太陽』五卷一〇号、一八九九年九月五日、『清議報』一六冊、同日転載、『文集』四)によると、春秋戦国までの中国とローマ時代までの欧州とは、ともに家族時代、酋長時代、封建時代と同様の発展段階をたどり、ほとんど「国体」に相違はなかったが、秦の始皇帝の統一から分岐は始まった。ローマ時代以降も欧州では、列国並立、競争の状態のまま貴族政治が継続し、「階級の風」がやまなかつたのに対し、秦漢以降の中国では合邦統一の状態が常態となり、貴族のいない無階級の社会が成立した。秦漢以降中国と欧州の「国体」は統一と並立、無階級と有階級と、両極に分かれた。これこそが一九世紀における欧州と中国の乖離をもたらした歴史的根源とみなされるのである。

梁啓超を悩ませたのは、このような「国体」の異同と、かの春秋三世説の文明史観との間にひきおこされる矛盾をいかに処理すればよいかの問題であった。大同の世をゴールとする「文明の公例」からいえば、列国並争より合邦統一が優り、有階級より無階級が優れているはずである。ところが一九世紀末の時点においては、二千年にわたって大一統のもとで合邦統一、無階級の社会を維持してきた中国の方が、列国並争、有階級の状態に低迷してきた欧州に、「文明進歩」の点でかえって遅れをとってしまったのは、一体なぜなのか。

この問題に答えるためには、いまひとつ嚴復によって紹介されたばかりの進化論を援用する必要があった。進化論

の原理によれば、列国並立の競争状態におかれている政府と国民は、存立のために絶えず努力して進歩を求める。その結果、「国政修り、民氣強くして国民の文明、幸福、遂にこれに随いて日に進む。此れ列国並立の効用なり」。この因果関係はやがて、『新民説』において「競争は文明の母」あるいは「競争は進化の母」(『専集』四、一八頁、五六頁)と定式化され、二十年にわたって梁啓超の思考を方向づけるキー概念の一つとなった。<sup>(7)</sup>

今日欧米各国の競争、……其の原動力は乃ち国民の自存を争うより起こる。天演家の物競天択、優勝劣敗の公例を以てこれを推せば、蓋し已まんと欲して已む能わざる者あらん。故に其の争いや国家の事に属するに非ずして人群の事に属し、君相の事に属するに非ずして民間の事に属し、政治の事に属するに非ずして経済(日本の名を用う。今これを訳して資生と為す)の事に属す。(『論近世国民競争之大勢及中国前途』『清議報』三〇冊、一八九九年一月二五日、『文集』四、五九頁)、ここでの「国家」はまだ朝廷に近い意味しかない)

しかし注意を要するのは、梁啓超は中国の「国体」をただ単に文明進歩の阻害要因として一面的にマイナス評価のみを下していたわけではないということである。たしかに国家主義、国民意識の形成という面では、秦漢以降の「国体」は欧州の「国体」のように適合的なものではなかったが、翻って今日の世界でヨーロッパ近代文明と対等の活きた文明を保持しているのもまた中国だけである。

我が中華、戦国の時に当たり、南北両文明、初めて相接触して古代の學術思想全盛に達す。隋唐の間に及びて、印度文明と相接触して中世の學術思想、光明を放大せり。今は則ち全球、比隣の若し。埃及、安息、<sup>メキシコ</sup>墨西哥の四祖国、其の文明、皆已に滅べり。故に欧人と交わると雖も、新現象を生ずる能わず。蓋し大地今日只両文明を有するのみ。一は泰西文明、歐美是なり、二は泰東文明、中華是なり。二十世紀は則ち両文明結婚の時

代なり。(論中国學術思想變遷之大勢)『新民叢報』三三、一九〇二年三月一日、四六頁、『文集』七、四頁)

日本亡命一年にして「稍能読東文、思想為之一変」(三十自述)『文集』一一、一八頁)の後は、変法イデオロギーにひきつけた古典派経済学の世界主義にたいする賛美はもはや論説の表面にあらわれなくなる。それにかわって、競争を母とするヨーロッパ近代文明の形成を歴史的な観点から通観する作業の一環として、その形成過程におけるアダム・スミスの役割を検証する試みがくりかえされた。<sup>(8)</sup>

一九〇二年二月八日に創刊した『新民叢報』第一号では、梁啓超は二つの文章でアダム・スミスを取りあげている。コペルニクスからダーウィンまで、西欧近代文明の形成に功績のあった十人の学者を紹介した「論學術之勢力左右世界」では、ルソーにつづいて第六番目にアダム・スミスを挙げ、「一八四六年以後、英国の自由貿易政策 Free trade を決行し、尽く関税を免じて、以て今日商務の繁盛を致すは、斯密氏原富の論、これを為す」と、その『国富論』が一九世紀イギリスの繁榮、さらには世界経済の原点となったことを指摘している。それは政治思想の面で、ルソーの『民約論』がフランス革命、ひいては世界の民主主義革命の原点に位置づけられるのと、パラレルな関係におかれる。『新民説』ではより直截に「斯密、旧生計学を破壊して、新生計学すなわち興り、盧梭、旧政治学を破壊して、新政治学すなわち興る」(『新民説』論進歩)『新民叢報』一〇、一一号、一九〇二年六月二〇日、七月五日、『專集』四、六二頁)とこの関係が述べられている。西欧近代創出の原動力となった自由主義は、政治学のルソー、経済学のアダム・スミスを二大源流として生み出されたというのである。

他方「紹介新著」の欄では無署名ではあるが、梁啓超の筆になるもの(すでに李国俊氏の判断がある)と考えてよい。敵復訳『原富』の紹介がある。ここでもその価値を「後起の諸家の説は、総じてこの書を引申するとこの書を是正するとの両途に外ならず、斯密氏の範圍を出づる能わずと謂うと雖も可なり。然らば則ちこの学を治めんと欲する者は、固より万この書を読まざる可からず」と述べ、西欧近代経済学がアダム・スミスにはじまることを断言している。こ



の紹介の中で梁啓超は、敵復の訳業に対して、専門用語について「華英对照表」を作成して以後の翻訳に便宜を与えられたという要望とともに、「叙論」巻を著し、此の学の沿革を略述して、斯密氏以前の流派は若何、斯密氏以後の流派は若何、斯密氏のこの学中における位置、功徳は若何、其の概を綜じてこれを論じ、以て後学に餉られんことを」との注文をつけている。<sup>(9)</sup> 西欧経済学説史における位置を明確にしてはじめてアダム・スミスの功績が明確になるとのこの指摘は、西欧経済学に対する梁啓超自身の姿勢の変化を反映していた。アダム・スミスを始祖とする古典学派の経済学説は、歴史的なパースペクティブから相対化して検討する必要性がある、と認識されるに至ったのである。

### 三、歴史学派への傾斜

西欧経済学説史におけるアダム・スミスの位置を明らかにする作業は、本来梁啓超が敵復『原富』の訳業に対して提出した要求であったが、結局は梁自身が担うことになった。『新民叢報』七号（一九〇二年五月八日）から七回にわたって連載された「生計学学説沿革小史」がそれである。巻頭に付せられた「例言七則」の第一に列挙された「嘗て侯官の嚴先生に其の大略を論次し以て後学に詔えられんことを請うも、先生方に他業に従事し、未だ及ぶ能わざるなり」との言及は、あきらかに『新民叢報』創刊号での要望と同七号での敵復の表明をふまえたものである。例言第三ではまた「茲の学訳出の書、今はただ原富の一種あるのみ（其の在前の二、観るべき無し）。理深く文奥にして、読むこと易からず、先ず本論を読み、擁護の資と為すべしとも述べている。執筆開始の段階ではあくまで、アダム・スミスの『国富論』をよりよく理解し、その学説史上の価値を顕彰することを目的として、経済学説史の流れの中にそれを正しく位置づけることこそ、「生計学学説沿革小史」と命名されたこの西欧経済学説史のモチーフであった。

しかし動機と結果の不一致という事態は往々にして起こるものであるが、この「生計学学説沿革小史」の場合は、すでに筆を起こした段階からその可能性をはらんでいた。「例言七則」第四で梁啓超は、この小史を執筆するに当た

つては三人の学者、「英人の英格蘭 Ingram、意人の科莎 Cossa、日人の井上辰九郎」の経済学説史を参照したと明記している。当時すでに日本語訳があった経済学説史はあまり多くはない。おそらくは、ジェー・ケー・イングラム著、阿部虎之助訳『哲理経済学史』（経済雑誌社、明治一九年一〇月、原著は John Kells Ingram, *History of Political Economy*, London, 1888）、ルイギー・コッサ著、阪谷芳郎重訳『経済学史講義』（哲学書院、明治二〇年七月、原著はイタリア語第二版からの英訳本 Luigi Cossa, *Guide to the Study of Political Economy*, London, 1880）が前二者にあたり、三番目は井上辰九郎述『経済学史』（東京専門学校校政経済科第三回一部講義録）（東京専門学校出版部、明治三二年）を参照したのである。<sup>(10)</sup>

これら三冊は、極めて明確な共通項をもつ経済学説史であった。コッサはドイツに留学してロッシヤ、シュタインに師事したイタリア歴史学派の中心人物である。イングラムはアイルランドのダブリンで百科全書の編集に従事し、古典学派全盛のイギリスにあってあえて歴史学派を擁護して、両派の学説を客観的な立場から公平に批判した人物とされる。『哲理経済学史』の訳者、阿部虎之助はその自序で「(イングラム)氏は歴史学派の一人として実に批評者の位置に立ちたれども必ずしも自派に偏せず能く英国正統学派の誤謬を挙げ又独逸歴史学派の欠点を示し」と解説している。いずれにしても、イングラム、コッサの両書とも、歴史主義の立場から経済学説史を編纂しなおして、古典学派の功罪を闡明する意図のもとに執筆されたものであった。井上辰九郎の『経済学史』は、オリジナルな書き下ろしではなくイングラム、コッサの両書を敷衍した学説史である。ごく大ざっぱにいえば、古代、中世、近世を叙述した前半の第一―二編はコッサ、最近世の重農学派、スミス学派（古典学派）、歴史学派、米国経済学を叙述した後半の第三編はイングラムに依拠している。

したがって梁啓超の列挙した三人の著書は、若干の出入りはあるものの、いずれも歴史主義の立場から学説史を再構成したものであったのである。つまり梁啓超は学説史執筆のための材料を選択した時点で、すでに歴史学派の枠組みを通して西欧経済学説史を通観することを余儀なくされていたわけである。

三冊の學說史はともに、古代、中世、近世、最近世（一九世紀）という時期区分を基本にして章を立てている。その中では、イングラムの構成がやや特徴的である。コッサと井上は重農學派と古典學派とそれぞれ一章をたてて二つの學派として扱っているのに対し、イングラムはアダム・スミス以前の時代と以後の時代という一応の区分を設けるものの、両者を「自然的自由主義」の名称で一括して一章のなかに同居させている。この処置は、自然法的な普遍主義を唱える啓蒙主義時代の經濟學派（重農學派、古典學派）と、歴史主義的な個別性を重視するロマン主義時代の經濟學派（歴史學派）の對比をより鮮明にする効果をねらったものであった。イングラムが「自然的自由主義」の經濟學派を区分するためだけに用いたアダム・スミス以前と以後の區別は、梁啓超の「生計學學說沿革小史」ではさにより大きな意味合いを付与され、古代から最近世にいたる經濟學說史總体の分水嶺として設定されている。このようにアダム・スミス出現以前と以後で經濟學說史全体を二分したのは、學說史の中に正しく位置づける作業によってアダム・スミスの功績をより鮮明にしたいという、梁啓超の「生計學學說沿革小史」にかけた願望を反映しているものと考えられることもできる。

ともあれ、歴史學派の観点から西歐經濟學說史の敘述に乗りだした梁啓超は、当然のことながら執筆開始以前にいだいていたモチーフとは反対の方向に論を進めることになった。學說史において歴史學派の観点がもっとも明確に出るのは、重商主義（Mercantile System）から古典學派への轉換についての見解である。歴史學派は、一八世紀後半の専制主義から自由主義への轉換という時代思潮の大きなうねりが經濟學の分野に表出したのが、古典學派にはかならないと考へる。

十八世紀の下半、群治の組織、殆ど將に一新せんとす。その時の哲学、文學、種種異彩、みな思想革命、政治革命の媒と爲す。個人主義、漸漸と勢力を得て、所謂民約說、人權論等、漸く一世を風靡し、務めて以て政府の干渉を排除し、人民の自由を放任せり。凡百の學說みな然り、而して生計學も亦その一端なり。生計學の自由主義、

斯密・亜当に於いて大成せられたり。『文集』一二、二四頁)

重商政策の干渉主義にかわつて自由放任の経済政策を主張した古典学派は、批判者の常として重商主義のマイナス面ばかりを強調する嫌があつたが、さらにその古典学派の批判者として登場した歴史学派は、古典学派によつて否定された重商主義を歴史主義的な観点から再評価した。コッサ、イングラム、井上の経済学説史は三者とも、重商主義はアダム・スミス以降古典学派によつて蛇蝎の如くに酷評されてきたが、一国が工業化するに際しては必ず経過しなければならぬ一つの階梯であり、フランスの Colbert 主義、イギリスの Cromwell 主義はいずれも両国の経済的發展をもたらした有効な重商政策であつたと評価している。梁啓超も按語の中で「重商主義は、十六世紀以後の歐洲に在ては、誠に生計界の進歩を阻むを免れざるも、若し今日の中国に移植すれば、則ち誠に救時の不二の法門なり」と述べ、それぞれの国の發展段階に応じて重商主義は發展を阻害することもあれば、促進することもあるとの歴史主義的評価を下している。とくに工業化以前の段階にある現在の中国にとっては、むしろ重商主義的な保護貿易政策によつて自国の産業の保護、育成をはかるこそが「不二の法門」と認識されたのである。

重商主義に対する評価の転換は、その批判者である古典学派に対する評価の変化をももたらした。「論者の十九世紀の文明、一として自由競争の賜を受けざるは無しと謂うは過言に非ず。然りと雖も天下の事、利と弊とは毎に相倚伏す。自由競争の過度、其の病国、病群や忽ち又前賢の意計の外に出づ」(『文集』一四、三五頁)。たしかにアダム・スミスの唱えたレッセフェールは、ヨーロッパ近代文明を生みだした車の両輪の一つではあつたが、いまや過度の競争が深刻な社会問題を惹起するにいたつた。政府の干渉政策に反対して自由放任政策を支持するアダム・スミスの言説に対して、梁啓超は次のような評価を下す。

斯密のこの言、蓋し欧州當時の治体に針對して言えり。彼の時、重商主義極盛の後を承けて、各国政府もつぱら

干渉を以て政策と為す。干渉の弊、民はその情を失し、物はその理を失す。……夫れ当時の欧州、民智すでに大いに開け、民みな自存を争う所以の道を知るを以て、しかも猶これを限制することかくの若し、誠なるかなその民の病たるや。わが中国の若きは、則ち政府と民業とは向來漠としてあい関切せず。以て自由を云えば、則ち中国は民の自由、極まれり。而してその弊も又かくの若し。故に斯密の言は当時の欧州を治す良薬にして今日中国を治す良薬にはあらず。……況や今日、帝国主義日に行なわれ、各国の民業みな政府を以て後楯と為し、以て出て世界に競う。その鋒に当たる者、又あに一人の力を以てよく効を奏せんや。〔文集〕二二、三四頁

マンチェスター学派のコスモポリタニズム的な自由貿易主義を先進工業国イギリスのエゴイズムと断罪したドイツ歴史学派は、自由貿易の普遍的価値の承認を拒否し、後進工業国ドイツにとっては保護主義こそが最適の経済政策であると主張した。まして重商主義段階すら経過していない中国にとって、アダム・スミスの自由主義経済は有効性をもたないと、梁啓超は考えるようになったのである。それ以上に重要な点は、「二百年來、世界通商政策の一大革命を生ずるは、みな斯密氏のこれを為すなり。然りといえども世運の遞変、往きて復らざるは無し〔易〕泰。近今は則ち保護主義の反動、また大起せり」という認識である。アダム・スミスの学説が樹立した自由主義、放任主義の時代は終わりを告げ、一九世紀後半の世界は保護主義、干渉主義の時代に回帰したのである。

近代ヨーロッパの経済システムを創造したアダム・スミスの功績を顕彰する目的から執筆のはじまった「生計学学説沿革小史」は、事志しとことなり、アダム・スミスの学説が有効性をもつ時代の終焉という意外の結論に到達した。この小史がアダム・スミス学説の途中で擱筆を余儀なくされた理由の一つは、この動機と結果の不一致が露呈したところにあるのかもしれない。

ともあれ、一九世紀の前半においてはイギリスの自由主義経済が世界の最先端を歩んできたが、一九世紀の後半はそれに対抗したドイツの保護主義経済が台頭著しく、二〇世紀をむかえてドイツの後塵を拝する日本も国民経済の離

陸に成功した。自由主義経済と保護主義経済に対する梁啓超の見解は、「其の長短得失、今に至るも尚未だ定論あらざる者なり」（『論中国學術思想變遷之大勢』）（『新民叢報』三号、一九〇二年三月、『文集』七、二三頁）と、なお慎重な面を残している時期もあったが、『新民説』に典型的なように政治論においても国民国家の建設という目標が明確になるにつれ、古典学派の自由主義経済学説よりも歴史学派の国民経済学説の方がより現実的な選択肢と考えられるようになった。

#### 四、民族帝国主義の時代

「生計学学説沿革小史」の執筆を通じて、古典学派から歴史学派への転換をとげた梁啓超の思想的軌跡は、経済学の領域だけの孤立した現象ではなく、歴史観、世界観にもかわる広がりをもっていた。日本亡命後の梁啓超に刺激を与えた書物の一冊に、ラインシュ著、高田早苗訳『十九世紀末政略と政治』（東京専門学校出版部、明治三三―三四年、原著は P. S. Reinsch, *World Politics at the End of the Nineteenth Century: as influenced by the Oriental Situation*, New York, 1900. 明治三四年一二月の再版では、書名を『帝国主義論』と改めた）がある。この書物から梁啓超は、欧米諸国は一八世紀後半―一九世紀前半の「民族主義」の時代から一九世紀後半―二〇世紀の「民族帝国主義」の時代に突入したことを承知した。

今日の欧米は則ち民族主義と民族帝国主義との相嬪の時代なり。今日の亞州は則ち帝国主義と民族主義との相嬪の時代なり。専ら欧州に就いて論ずれば、民族主義は十九世紀に全盛なるもその萌芽するや十八世紀の下半に在り、民族帝国主義は二十世紀に全盛なるもその萌芽するや十九世紀の下半に在り。今日の世界は実にこの兩大主義活劇の舞台に外ならず。（『国家思想變遷異同論』）（『文集』六、一九頁）

この議論を『自由書』の「干渉与放任」をはじめ関連するいくつかの文章で補完すると、民族主義時代をリードした思想は既述のように、政治面ではルソーの『民約論』、経済面ではアダム・スミスの『国富論』に代表される放任主義であった。これらの思想は、それ以前の時代を支配した専制政治、重商主義の干渉主義に対するアンチテーゼとして登場したが、放任主義が極限に達するとその矛盾を解決するために干渉主義が再び台頭してくる。民族帝国主義時代に入って、政治ではブルンチュエリの国家有機体説に代表される干渉主義が有力になってきたのは、放任主義の当然の反動ととらえられる。経済の面では事情はやや複雑で、古典学派の自由放任主義は歴史学派と社会主義派の二種の干渉主義にとってかわられる形勢である。古典学派の自由放任主義は、産業革命期のイギリスにはきわめて有効な経済政策であった。個人の自由な経済活動が自由貿易体制を通じて世界経済の発展に寄与するとの予定調和にもとづくレッセフェールの政策は、イギリスを世界の工場とする世界経済システムをつくりあげはした。しかしその一方でレッセフェールの行き着く先には、先進工業国と後進工業国の国家間矛盾、資本家階級と労働者階級の階級間矛盾という二つの回避できない矛盾が待ちかまえていた。

前者の国家間矛盾を克服すべく登場してきたのが、あのドイツ歴史学派の保護主義的経済学説であった。梁啓超はやや後の文章においてではあるが、行政主導型の保護主義を孔教派のチームである「保育主義」に置き換えて、「十九世紀の前半に当たり、放任論、殆ど一世を披靡せり。……国際競争既に日に劇しくして、徒に放任のみにては以て治を為すに足らず。是に於て保育主義、復た驟に昌え、<sup>ドイツ</sup>徳、日、これを行ない以て東西に覇たり、各国相率て尤に效う」(『中国立国大方針』(『庸言』一卷一期、一九一二年、『文集』二八、四六頁)と、一九世紀前半をリードしたイギリスの放任主義にかわって、ドイツ、日本の保護主義経済が世界の潮流となった経緯を説明している。<sup>(1)</sup>

他方、後者の階級間矛盾を止揚する理論と考えられたのは、マルクス主義をはじめとする社会主義学説であった。これもまた自由競争の行き着く先に出現したもので、「自由競争の趨勢は、乃ち兼并盛行し、富者は益す富み、貧者

は益す貧するに至る。是において近世の所謂社会主義なる者出てこれに代る。社会主義なる者は、その外形、純に放任を主する若きも、その内質は則ち実に干渉を主する者なり」と、実質は干渉主義の学説であると考えられる。別の文章ではより簡潔に「社会主義なる者は、自由競争反動の結果」『文集』一四、三六頁）とも断定されている。

かくして梁啓超は、欧米各国は前近代の干渉主義から近代の放任主義を経て、二〇世紀を迎えた現在、政治、経済の両面でふたたび干渉主義の時代に回帰しつつあるとの認識に達した。かつてルソーの政治思想に傾斜していた時期の梁啓超は、春秋三世説の進歩史観をベースにししながら、人類の歴史は自由の実現に向けて一直線に進化する過程であるとの歴史観に立っていた。しかし、干渉主義への回帰を承認した今、この歴史観には修正が必要になった。

十八世紀の中葉より以後、個人自由主義、日は一日より盛んとなる。吾昔以為らく、干渉よりして自由となるは、進化の原則なり、既にして自由となれば、則ち断じて退きて復た干渉に返るの理なしと。近二十年来世界大勢の傾向を観るに及びて、爽然として以て驚くを禁ぜず。夫れ帝国主義や、社会主義や、一は則ち政府当道の憑藉するところと為り、一は則ち労働貧民の執持するところと為り、その性質本より絶えて相反するも、その実行の方法は一に皆干渉を以て究竟と為す。故に現代の所謂最新の学説は、駸駸として幾ど悉く十六、七世紀の旧に還りて純に十九世紀の反動を為す。『文集』一四、三四頁）

人類の歴史は干渉から自由へと不可逆的に進化するのではなく、自由、放任と干渉、保護が交互に入れ替わりながら進化していくものにとらえなおされた。梁啓超の歴史観は、いわば単純な直線的進歩史観から循環史観とミックスした螺旋的進歩史観へと変化したのである。そこにおいては、一度は過去の遺物として歴史の歩みから取り残されたものであっても、歴史が一つのサイクルを終えて次の段階にスパイラルする際には、新しい意義をふきこまれて再生しうるものとみなされる。経済思想において、古典学派によって歴史の淵に葬りさられた重商主義が、歴史学派の手



で再生されて新重商主義として蘇り、政治思想において、ルソーによって否定された専制主義が、ブルンチュリの国家有機体説に導かれて「開明専制論」に生まれ変わりうる契機は、この歴史観の変化にあった。

世界観、歴史観の転換をもとまなかった梁啓超の古典学派から歴史学派への転換は、畢竟するところ「民族帝国主義」の時代にはいった世界において中国が生存していくための方途を模索したプロセスの一環にほかならなかった。梁啓超はその方途を国民国家の形成に求めたのであるが、歴史学派の国民経済学説は、あたかもアダム・スミスとルソーが市民社会の形成に不可欠の役割を果たしたように、政治思想の国家有機体説とともに国民国家の両輪をなすべきものだったのである。

もっとも梁啓超においては、この両輪はあくまで政治的独立が先行してはじめて正常に機能するものと考えられていた。一九〇二年四月の『新民叢報』五号に掲載した「論民族競争之大勢」ですでに、政治的に自立できない民族で経済的な成功を収めた民族は絶無であるとの見解を表明している。さらに辛亥革命後の一九二一年一〇月の演説でも、西欧近百年来の国民経済の発展と海外への経済的膨張は、せんじつめれば政治の改良に起因すると明言している<sup>12)</sup>。

梁啓超は歴史学派の立場から、アダム・スミスの経済学説を「箇人を以て本位と為し、国家を以て本位と為さず」と批判した上で、国民経済の重要性を「経済を言う者は箇人を挙げて羣を遺す能わず。而して羣の進化は、家族よりして宗法、部落、以て今日の国家に達す。国家とは羣体の最も尊き者なり。是の故に善く経済を言う者は、必ず全国民を合してこれを盈虚消長せしむ、此れ国民経済学の貴ぶべき所為なり」（『管子伝』〔専集〕二八、四六頁）と述べている。

アダム・スミスに対する歴史主義的検証を通じて、歴史学派の経済学説にたどりついた梁啓超は、当面の経済的処方箋として政治優先の国家至上主義的なドイツ国民経済学説を選択した。それは、かつて梁啓超が耽読した『佳人之奇遇』の中で紅蓮女士の語ったアイルランドの悲劇的な運命を回避しうる唯一の構想として選択されたのである。

かくして梁啓超の構想する中国国民国家の形成は、まず開明専制論にもとづく政治的な国民統合がなによりも優先

され、経済的な問題も国民統合にかかわる分野だけが重視されることになった。経済学好きを公言していた梁啓超が、「生計学説沿革小史」断筆以降、『民報』との論争で土地国有化の問題を扱ったのを除けば、政治と経済の接点に位置する財政、金融のほかは、経済学の問題をほとんど語らなくなり、さらに辛亥革命以降の袁世凱政権で財政総長のポストを希求し、また段祺瑞政権であえて財政総長に就任したのは、このような事情によるものと考えられる。<sup>13)</sup>

## 五、第一次世界大戦の衝撃

第一次世界大戦勃発当初、梁啓超はドイツの必勝を確信していた。「吾れ意うに、今度の戦争は之を簡言すれば民族国家の戦争と曰うべし」(『欧戦後思想変遷之演説』『申報』民国三年一月二日)。第一次世界大戦が「民族国家」すなわち国民国家の優劣を決すべき戦争であるとすれば、国民国家の最優等生であるドイツが勝利を収めるのは、進化の必然とみなされる。「彼の德国なる者は実に近世国家の模範なり。国家主義もし消滅すれば斯ち已むのみ、此の主義苟も一日存在すれば則ち此の模範国断じて劣敗の地に陥るを容れず……徳をして敗れしめば則ち歴史上進化の原則、今より其れ以て推棄すべし」(『欧州戦役史論』『專集』三〇、七〇頁)。しかしその一方で、この時期の梁啓超はすでに、歴史主義的な思考の延長線上において、ドイツ流の国家主義を歴史進化の一過程と相対化する視点も芽生えさせていた。「国家主義は百年來より起りて盛を今日に極めるに過ぎず。自今以往、能く永くこの盛象を持すると否とは、殊に未だ知るべからず」(『孔子教義實際裨益於今日国民者何在欲昌明之其道何由』『大中華』一卷三三、一九一五年二月二〇日、『文集』三三、六七頁)、巴斯蒂「梁啓超与宗教問題」『東方学報』七〇冊、一九九八年三月に引用)。

ドイツ流の国家主義に対するこのようなスタンスは、第一次世界大戦の進行、とりわけドイツ敗北への展開とともに、傾倒から懐疑へ、さらに否定へとかわっていった。<sup>14)</sup>一年以上におよぶヨーロッパ訪問の間に大戦の惨禍をつぶさに目撃した梁啓超は、一九二〇年三月の帰国早々、戊戌の年の変法運動以来長年にわたって中国がヨーロッパ近代の

政治、經濟制度を模倣しようとして試みながら、そのたびに挫折をくりかえしてきた原因をつぎのように分析した。

欧州の此れ「百年來の進歩」を致す所以の者を考うるに、乃ち其の社会上政治上固有の基礎に因りて自然に發展して以て成れる者なり。其の固有の基礎、中国と同じからず、故に中国、效法する能わず。欧州、此の百年の中に在りては一種不自然の状態の中に在りと謂う可く、亦病的状態の中に在りと謂う可し。中国、此の種の病態に效法せんとす、故に成功する能わず。〔梁啓超年譜長編〕九〇〇頁

二十年余り以前、戊戌變法失敗の時に、すでに梁啓超は中国と欧州の歴史に根ざす「国体」の相違という観点からこの問題を検討したことがあった。しかしそこにおいては、模倣できない原因はもっぱら中国の「国体」にあるとされ、二千年來「大一統」にあった中国は、合邦統一、無階級で競争の絶えた「国体」のゆえに、文明の進歩から取り残されたとの解釈がなされた。とりわけ「天下有るを知りて国家有るを知らざる」国家觀念の欠如が、欧州近世の列国並争に起因する一九世紀の「民族帝國主義」時代に中国が適應できなくなった決定的な要因として指彈された。ところが第一次世界大戰にドイツ國家主義の没落ととも民族帝國主義の終焉をみた梁啓超は、以前の「国体」という用語を「固有の基礎」という言葉に置き換えてはいるものの、中国の側ではなく欧州の異常な「固有の基礎」にこそその根本原因があると考えるようになった。一九世紀のヨーロッパ近代文明は、欧州諸国の國家主義にもとづく常軌を逸した生存競争がもたらした「病的状態」にほかならず、正常な「固有の基礎」にたつ中国がその「病的状態」の模倣に成功できなかったのは、むしろ事の当然と考えられたのである。

西歐近代文明の精髓と目されていた國家觀念もまた、排他的な「嫉妬の感情」を利用して培養されたものである關係から、その上に築かれた國民國家を至上とする西歐社会は、戦争の狂気をはじめとする生存競争の不安にたえず曝されることになった、と斷罪される。「國家主義の苗は、常に人類の交相に妬悪する感情を利用してこれを灌漑し

て日に蕃碩に趨く。故に愈よ發達して現代社会机陞不安の象、乃ち愈よ著わる」(『先秦政治思想史』『專集』五〇、二頁)。このような国家主義に対する価値観の一八〇度転換は、かつて文明進歩の阻害要因と断罪された中国の「団体」に対しても評価の転換をもたらした。中国人は「文化を有してより以来、始終未だ嘗て国家を認めて人類の最高団体と為さず。其の政治論は常に全人類を以て其の対象と為す。故に目的は平天下に在りて、国家は家族と共に「天下」を組成する一段階を為すに過ぎず」(『先秦政治思想史』『專集』五〇、二頁)。国家主義を否定した梁啓超は、国民国家をささえる政治、社会、経済の根幹ともいうべき代議制度、競争主義、資本主義にかえて、中国固有の基礎である民本主義、互助精神、小農制度を「最も世界の新潮に合する」ものとして対置する。

中国は資本集中<sup>(16)</sup>に対して最も適宜ならず。数十年これが效法を為さんと欲するも、始終失敗せり。然れども此の失敗は未だ必ずしも不幸と為さず。蓋し中国は貴族地主無きに因り、始終小農制度を実行す。此の種の小農制度は法国は革命より後始めてこれを得、俄多数派も亦此の制を主張す、而して中国は則ち固よりこれ有り。現代の経済は皆農業を以て経済の基礎と為せば、則ち中国の資本主義を学びて未だ成らざるは、あに天幸に非ずや。

(『梁任公在中国公学演説』『申報』民国九年三月一日)、『梁啓超年譜長編』九〇一頁

これら三点セットの総入れ替えは、一言でいえば儒家的価値観の位相へのシフトと称してもよいであろう。国家至上主義の経済とともに「自由競争反動」のいまひとつの結果である社会主義についても、ロシアの社会主義革命はレーニンの人格が全ロシアを感化した結果にはかならず、「中国人の中庸の性格」にはふさわしくないとして、やはり儒家的立場から直截に拒絶の意志が表明される。

国民国家の模倣に腐心していた時期、梁啓超は「先秦時代の中国は頗る欧西の今日に類す」(論中国学術思想變遷之大勢)、『文集』七、三二頁)というアナロジーにもとづいて、春秋戦国期の諸子百家に再評価の光を当てたことがあ

た。群雄割拠の春秋戦国期は、百家争鳴の諸子乱立期で儒家にとつては暗黒期であったが、學術思想の活発な展開という面からみると、列国並争のヨーロッパ近代に匹敵する極盛の時代であった、というのである。なかでも齊の桓公に覇を唱えしめた管子は、「首めて国家主義を北東に倡え、二千年後の国民国家においても不可欠の国家思想、法治精神、地方制度、經濟競争、帝国主義という五つのカテゴリーで、先駆的な役割をはたしたと賞賛された。

梁啓超は一九一〇年に専著『管子伝』<sup>(16)</sup>を出版して、「中国の最大政治家にして亦學術思想界の一鉅子」であるこの管子を顕彰し、国民經濟學説においても「二千年前に於いて其の先河を導いた」ことを大書する反面、管子らを霸道を行なう「民賊」と謗つて王道を主張した孟子に対しては、後世の人が管子を誤解する種を蒔いたとの理由から批判をあげた。国民国家の形成を価値基準とすれば、春秋戦国時期は国家主義の管子をはじめとするさまざまの学派が、百花繚乱の觀を呈した中国學術思想の黄金時期とされる一方、前漢の儒學統一以降は、逆に「一尊、定まりて、進化の沈滞」(『文集』七、五八頁)した學術衰退の時期と評価は反転するのである。

しかしこのような見取り図は、第一次世界大戦をはさんでいまいまだ修正されることになった。大戦の惨禍とドイツの敗北という嚴然たる事実をまえにして、国家主義を一種の「病的状態」にすぎなかったことを承認するほかないとすれば、『管子』『商君書』などの「法家者流の生計政策は、重農為ると重商為るとを論ずる無く、要は皆国家主義の基礎の上に立つ。所謂「我れ能く君の為に土地を開き、府庫を充す」、孟子の斥して「民賊」と為すところの者なり」と、従来からの評価がふたたび踏襲されざるをえず、さらに「彼の宗は徒に此れ『塩鉄官營』を以て国内の貧富を均しくするのみならず、更に其の国家資本主義を利用して以て侵略にも従事せり。……而して現代の列強の慣用するところの生計侵略政策も亦大率斯の道に由るなり」(『先秦政治思想史』『專集』五〇、一七〇頁)<sup>(17)</sup>と、戦国時代の霸道と西欧近代の帝国主義政策とに対し、等しなみに批判がくわえられることになった。

国民国家至上主義という二十年來の呪縛からときはなされた梁啓超は、管子の国家主義的な霸道に対抗して「平天下」の王道を掲げた儒家が、群雄割拠の戦国時代を制して、ついに中国人の思想を「世界主義」に止揚させたように、

民族帝国主義の現代世界にあってこの儒家思想にねざす中国の「超国家主義（平天下主義、世界主義）」が、やがて列国並争の「病的状態」を止揚するうえで相応の役割をはたすことになるであろうとの展望を抱くに至った。

### おわりに

この時期の梁啓超が到達した歴史認識に従えば、人類の歴史は二千年の歳月をかけて、その一サイクルを終え、次の段階にスパイラルするべき時期をむかえた。春秋戦国時代の中国を天下とする儒家の世界主義が、民族帝国主義時代の地球を天下とする世界主義に再生できるかどうか、この一点にそそがれた梁啓超の眼は、文化的な融合を通じて「天下」の中身をたえず膨張させてきた中国の歴史のベクトルにその再生の可能性をみた。儒家の「超国家主義（世界主義）」は得失相半ばするものの、「最後に総決算すれば、得るところ優に失うところを償いて余り有るに足る。蓋し其の結果、常に「中国人」の組成分子を増加して其の所謂「天下」の内容、日に益す拡大すればなり」（『先秦政治思想史』（『專集』巻五〇、三頁））。このように膨張する「天下」は、やがて地球と等身大にまで拡大していくものと認識されていた。かつて国家主義への転換途上にあつた一九〇二年に、梁啓超が予感した世界の将来像は、「二十世紀は（東西）両文明結婚の時代」というコピーに集約されるが、第一次世界大戦以降の世界はまさにそのような時代に入つたと判断されたのである。

古典学派のコスモポリタニズムから歴史学派の国民経済学説へ、そしてついには世界主義の展望へと、梁啓超の経済思想は彷徨をつづけた。そのめまぐるしいバリエーションのなかに、もし通奏低音が流れているとすれば、それは経済にかぎらず、政治、社会、文化いずれの領域の問題を考察するに当たつても、つねに人類史の視点から中国の「国体」の歴史的特質を析出することを最優先する梁啓超の思考パターンに求めることができる。しかもその人類史の基調をなしたのは、公羊派の春秋三世説に根ざす発展史観であつた。現在の世界が人類発展史のどの段階に位置す

るのか、その位相に対する判断の大きな転換こそが、国民国家への憧憬から懐疑へという梁啓超の思想的彷徨をもたらしたのである。

## 注

(1) 梁啓超は変法運動期から日本亡命期のある時期まで、political economyの訳語として、平準学、資生学、富国学、理財学、生計学などのさまざまなタームを試行した。「富国学之書」に「日本、名づけて経済書となす」(「変法通議 論訳書」『時務報』二七、二九、三三号、一八九七年五月二日、六月一〇日、七月二〇日、『文集』一、七二頁)、(「資生学」に「即ち理財学、日本、之を経済学と謂う」(「論学日本文之益」『清議報』一〇期、一八九九年四月一日、『文集』四、八〇頁)との双行注をつけるなど、経済ないし経済学というタームはあくまで日本語として扱っている。師の康有為ですら「凡そ六経は皆経済の書なり」(『日本書目志』卷五政治門、八b)と認識していた当時の中国知識界の事情を考慮すれば、この慎重さは無理からぬところであろう。また梁啓超も編集に関与した『和文漢読法』には和漢異義字の対照表が八五頁にわたって掲載されているが、日本語の「経済」という語彙には「理財学、資生学」が当てられている。この問題については、別稿を用意している。

(2) 日本でも自由民権運動の時代には自由主義経済学説の旗手としてフォーセットがもてはやされたが、実際に読まれたのは夫人ミリセント (Rawcett, Millicent) の手になる入門書の訳訳であった。フォーセット自身の著書は、この汪鳳藻の漢訳本が岸田吟香の経営する楽善堂によって復刻され流布していた。

(3) 本書の翻訳はおおむね直訳に近いが、一部中国人に理解しやすいように翻案の施されているところがある。例えば、第二五節の地域間分業の解説では、原書は当然のことながら例としては鉄の産地、スタンフォードシャ等等、銅の産地、サウスウエールズなど、イギリスの地名を列挙しているが、中国人に馴染みのない地名と判断した訳者は、絹織物の蘇州、杭州、陶磁器の江右など中国の実例に置き換えている。このような翻案は杉山重威の日本語訳版でも散見し、原書が限界効用の比喩として挙げているドーバー海峡トンネル内の空気を江戸深川の水に置き換えている例などがある。

(4) 葉乾坤『梁啓超 旧韓末文学』法典出版社、一九八〇年三月によると、「史記貨殖列伝今義」には、金成喜訳「理財説」(『大韓自強会会報』一〇―一二号、光武十一(一九〇七)年四月二五日、五月二五日、六月二五日)という韓国語訳があると

いう。

(5) もっとも一方では一八九六年に発表した「論加税」(『時務報』五册、九月一七日)では、「税則は一国の私権なり」という立場からイギリスが中国の関税自主権を奪ったことを批判し、また一八九七年に発表した「論金銀漲落」(『時務報』四三册、一〇月二六日)では、銀安には中国の輸出を促進し、輸入を抑制する保護関税的な作用あることを指摘し、自由貿易論から保護貿易論に転換した福沢諭吉の「銀下落論」(一八九三年)の影響を受けたのではないかと思われる議論を展開している。

(6) 上野格「東海散士(柴四朗)の蔵書——明治初期経済学導入史の一齣」(成城大学『経済研究』五五・五六号、一九七六年二月)参照。

(7) 梁啓超の進化論受容については、佐藤慎一「梁啓超と社会進化論」(東北大学『法学』五九巻六号、一九九六年一月)参照。

(8) 『新民叢報』創刊までの時期、梁啓超は東京専門学校(経済学専攻)の経済学専攻、天野為之と交流し、西欧経済学説について教えを乞うたようである。その様子を伝える筆談録の要旨が、中村忠行「天野為之と梁啓超」(『中国資料旬刊』一九五一年二月二日)に紹介されている。その一節に、当時の梁啓超の経済学に対するスタンスがうかがえる。「経済学というものは、個人の理財の学ではない筈である。清国に於いては未だ民智開けず、一家の理財に熱心なるものはあっても、一国の理財をかえりみる者が少ない。我々はそうした弊害を救わなければならないために、こうした苦勞を忍んでいるのだ……」と梁啓超は国家経済の重要性を強調している。なお天野との交流は、一九〇二年一月日清版權同盟をめぐる意見の対立を一因に途絶えたようである(天野為之「日清版權同盟が日本の実業に及ぼす永遠汎汎の利益を論ず」(『東洋経済新報』二二〇号、一九〇二年一月二五日)および梁啓超の作と推定される「是誠何心」(『新民叢報』二号一九〇二年二月二五日)を参照のこと)。

(9) この注文に対して敵復は、『新民叢報』七号所載の「与新民叢報論所訳原富書」(壬寅三月)で穆勒「名学」の翻訳作業を優先すると表明している。

(10) この点については、宮村治雄「梁啓超の中国思想家論——その「東学」との関連において」(『中国—社会と文化』五号、一九九〇年六月)参照。なお阪谷の訳書はコッサ原著後半の historical part の翻訳で、前半の general part の翻訳は天野為之『経済学研究法』(最初は東京専門学校講義録、のちに博文館『政治学経済学法律学講習全書』第六册、一八九〇年および博文館『社会文庫』第一九篇、一八九四年)として公刊された(杉原四郎『西欧経済学と近代日本』未来社、一九七二年、四七頁)。また「生計学説沿革小史」の韓国語訳は李豊鎬訳「生計学説」(京城石文館刊、一九〇八年(葉乾坤、前掲書))。

(11) しかしこの文章には、「覇」「效尤」という言葉の使用に見られるように、保護主義経済は時代の潮流で逆らえない趨勢で



はあるが、國際競争に生き抜くための必要悪といったニュアンスがすでに表れている。

(12) 梁啓超は「夫れ平準競争の起るは、民族の膨張に由るなり。而して民族の膨張する所以は、民族主義、国家主義に由りて来らざるなし。故に未だ政治界に自立する能わざるの民族にして平準界に於いて能く称雄する者有らず」(『論民族競争之大勢』『新民叢報』五号、一九〇二年四月八日、『文集』一〇、三五頁)といった主張をはじめとして、随所で政治優先の基本的立場を表明している。しかしその一方で『新民叢報』の同人のなかには「二十世紀の政治は政治の政治に非ずして經濟の政治なり。帝國主義の由りて来る所、列國軍備の由りて盛なる所を觀れば、則ち今日、經濟を捨いての外、更に所謂政治なし」(雨塵子『論世界經濟競争之大勢』『新民叢報』一四号、一九〇二年八月一八日、五二頁)といった認識も芽生えていた。

(13) 土地國有をめぐる民報派との論争で梁啓超が依拠したのは、アドルフ・ワグナーをはじめとするドイツ新歴史学派の經濟學說であった。とくにドイツ新歴史学派の影響下に執筆された河上肇『經濟學原論』上巻、有斐閣書房、一九〇五年は、「經濟上の慾望」という章を中心に多く梁啓超の論拠に援用されている。なお新歴史学派の分類によれば、經濟學は純正經濟學と応用經濟學に大別され、応用經濟學はさらに經濟政策學(狭義の応用經濟學)と財政學に区分される。ワグナーは財政學を「其實質上より言えば經濟學の一部にして其形式上より見れば國家學の一部なり」と規定している。新歴史学派の立場にたった梁啓超は、財政學を經濟學と國家學の接点に位置する學問分野と見なしたと考えられる。

(14) 戦前のドイツ國家主義に対する思い入れと、戦後における幻滅とは、梁啓超に思想的な影響を受けた当時の多くの中國青年がたどった思想的軌跡でもあった。のちに共產主義者となって梁啓超と対立することになる青年たちも例外ではない。戦前ドイツ流の軍國主義を救國の途と考えていた周恩来が、日本留學中にドイツの敗戦を目の当たりにした後、日記のなかに「以前、「軍國」「賈人政治」というこの二つの主義で中國を救えようと考えていたのは、いま考えてみると実に大間違이었다」(金冲及主編、狭間直樹監訳『周恩来伝 一八九八—一九四九』上、阿吡社、一九九二年、三八頁)との告白をのこしているのは、その代表例といえる。

(15) 資本集中の問題については、一九〇二年頃のトラストに対する梁啓超の異常なまでの関心を想起されたい。「故に學理上に於いては所謂社會主義なる者を産出し、事實上に於いては所謂托辣斯なる者を産出す」(『文集』一四、三六頁)。

(16) 『管子伝』の前半部分は、『新民叢報』二五号(一九〇三年二月一日)の新年大付録一の懸賞徵文披露に甲等の論文として掲載された「管子伝」を多く踏襲している。この文章の作者は、「広東省城衛辺街尚同寄廬 湯学智」と記されているが、選者の按語には「本社の総撰述は尚その意義の未だ尽さざる所あるを嫌い、偶たま筆を奮いてこれが訂改を為すに、滔滔とし

て自休すること能わず、遂に原稿の十分の六七を改めるに至れり」との断り書きがある。「総撰述」の梁啓超は自分の文章としても憚らないまでに添削を施したということであろうか。いま一つの可能性としては、最初から梁啓超の自作であったとも考えられないわけではない。この懸賞論文の募集広告は『新民叢報』二二号（一九〇二年一月三〇日）の巻頭に掲載され、一九〇三年一月一八日、壬寅年二月二〇日が締切日とされた。しかし『新民叢報』二四号（一九〇三年一月三日、壬寅年二月一五日）の巻頭には二五号の予告目次があり、早々と新年大付録一の懸賞徴文甲賞として「管子伝」が挙げられている。この時期はまだ『新民叢報』が奥付の期日どおり比較的コンスタントに刊行されていたと判断される（本書付録2参照）ことから推察すると、締切日以前からすでに甲賞が「管子伝」に決定していたことになる。そもそも三つある懸賞課題のなかで、

- (一) 中国国民道徳墮落の原因およびその救治の法を問う、(二) 全国小学教育普及の策およびその籌款方略を問う、に対して、(三) 管子伝——その事業およびその学説を述べよ、はやや異色の感がある。したがって、この懸賞徴文というイベント自体、国民国家のプロトタイプを實踐した管子を顕彰するために企画された自演劇という可能性も排除できないのである。
- (17) 梁啓超は「凡そ儒家、王霸の辨は、皆世界主義と国家主義との辨なり」と定義し、「齊の桓、晋の文に憚らざる所の者は、其の専ら己が国を以て本位となす為のみ」と齊の桓公らの覇者を国家主義とカテゴライズする（『専集』一五〇、一五五頁）。